



# 猫の遼太郎

黒猫の遼太郎 (先に逝った猫のお話し)

遼太郎が2011年2月5日午後10時30分ごろ旅立っていきました。その年の12月で11歳になるはずでした。お尻に傷があるのを見つけたのは2010年の8月末。それからの日々は、遼太郎にとって辛いものだったと思います。その中でも少しでも楽しみを見出してくれていたなら幸いです…。

最初はお尻がベトベトと濡れているのを、家に帰ってきて発見。翌日に病院へ連れて行って傷からの感染症と診断されました。その頃は私もお気楽そのもので、数週間もすれば治るのだろう…とっていました。ところが調べても調べても良くなる抗生剤が見つからず、傷は見る間に大きくなって…。手術を考えた末、CTスキャンを撮ってみたのです。

そうしたら傷は、お尻からずっと奥に伸びて腰骨の辺りまで、そこから背骨の間を通して背中にも達していました。背骨を通ると脊髄への感染が次の問題になってくるとのこと。脊髄から脳への感染が進むこともあるそうです。その時初めて、遼太郎の死を感じたのです。それでも遼太郎は頑張ってくれて、通院数ヶ月で完治の目途が立った頃でした。急激に痩せ始めている事に気付いて調べてもらったら、糖尿病を発症していたのです。遼太郎の第二の試練でした。

人間の糖尿病は一般的に遺伝や生活習慣病を思い浮かべますが、かかりつけの先生に聞いたところ猫は身体的ストレスに寄るものが多いとの事、お尻の傷が引き起こしたものなのかなあと勝手に思っています。糖尿病の治療を始めて、自宅でのインシュリン注射が日課になり、それでも遼太郎は機嫌よく過ごしてくれていました。週に1回の病院通いの車の中で、キャリーから身を乗り出して通り過ぎる車や景色を眺めるのが、遼太郎の楽しみになっていったのです。ワクワクしながら外を眺めている遼太郎が嬉し可愛く…、きっと治るであろうと信じている私には、楽しいドライブのようでした。

普通なら11月に三種混合の予防注射をするのですが、感染症のせいで注射はお預け、容態が良くなったら注射だね…と見送っていました。その頃はお尻の傷も少しずつ良くなっていて、もうちょっとだぁ〜と病院に行く私も傷の完治まであと一息と張り切っていたのです。12月に入って遼太郎がクシャミ・鼻水・涙目の時は、毎年ある花粉症のような症状だと思っていました。ところがそれは花粉症じゃなかったのかも…。

猫風邪の症状か?とと思っているうちにどんどん状態は悪化して、続く病気に体力も尽きていったように見えました。ご飯も自力では食べられなくなり、無理やり口に押し込んで体重が減っていくのを心配する毎日が始まったのです。その頃から点滴を自宅でするようになりました。それでも私はまだ遼太郎の復活を信じていました。ある日突然、パクパクとご飯を食べて、よくなることを疑わなかったのです。

その期待も空しく、遼太郎はご飯を自分から食べる事も無く、その上食べるのを嫌がるようになりました。当たり前ですよねぇ、口に押し込まれるご飯はさぞかし不味かったことでしょう。5.5キロあった体重は減り続けて4キロ程になり、後ろ足が萎えて立たなくなってしまいました。トイレに行っても済ませるまで立っていられなくて途中で座り込んでしまったり、倒れてトイレの縁で頭を打ったりするのは。でも私はまだ、食べてさえくれれば良くなると思っていました。遼太郎が病気に負けるなんて、そんな訳はないと…。

ある夜、帰るといつもと違う遼太郎の切羽詰った鳴き声がありました。何事だろう…と思うくらい居ても立ってもいられない鳴きかたでした。翌朝一番に病院に連れて行ったら、今日明日…と言われたのです。肺の片方に水が溜まって、黄疸の症状も少し出ている、オシッコが作れなくなって…。この時初めて、遼太郎はもうすぐ死ぬんだと実感したのです。その日は一日遼太郎という様にして、片時も離れませんでした。泣きながら遼太郎の世話をしながら、1秒も目を離すことが出来ないのです。これで生きている遼太郎の見納めかと思うと、時間がいくらあっても足りない気持ちでした。

遼太郎が苦しそうに呼ぶ度に、私はここにいるよ…と話しかけ、頭を撫でて少しでも安心して欲しくないかと願えばかりです。段々呼吸が弱くなり、リズムもまばらになり、いよいよか…と覚悟を決め、最後までちゃんと見てあげないと…、とっていました。白内障で見えない目がカッと見開かれて、透明の大量の水を吐いた後、遼太郎は大きなため息のように息を吐いて、体の力を抜いて丸くなって寝るように息を引き取りました。



黒猫の遼太郎が我が家にやって来たのは、2000年の年末、雪の降る寒い日でした。5、6匹の子猫が近くの公園で鳴いていたのです。

その中でも一番小さくて頼りなげで、ブルブルと震えている黒猫をジャケットの中に入れて帰ってきたのです。真っ黒い子猫は、すぐに元気いっぱい走り回り、公園で震えていたのが嘘のように、我が家と我が家の先輩猫に慣れていったのです。

その時の先輩猫は、老いて今も迫力は衰えない淳之介(社長)。気難し屋で、他の猫とは関わりになりたくないタイプ。

三毛猫の乙姫は子供を産んだ事は無いけれど、ビックリするくらい肝っ玉母さんで、小さい遼太郎を甲斐甲斐しく世話をするようになりました。

出ないおっぱいを吸わせていたのにはビックリ!「遼太郎は任せた!」と、全てお任せで、私は何の苦勞も無く遼太郎はすくすく育っていきました。遼太郎の優しい、気立ての良さは、乙姫の育て方が良かったんだと確信しております。

というのも、次に来た一葉も佐和子も遼太郎になつて、遼太郎が全て面倒を見てくれたのです。

まるで乙姫が遼太郎を育てたように…。

遼太郎はその2匹に何をされても怒る事もなく、愛しそうな目でジッと眺めているだけ…、そして2匹の子猫を安心させていたのです。

出ない男のおっぱいを吸わせている…というか、子猫に吸われている幸せそうな遼太郎には、“こいつは変な癖(性癖)がある”と思ったものです。

一葉は慢性腎不全で遼太郎より先に逝ってしまいましたが、後に来た佐和子は今も元気に走り回っています。

遼太郎が甘やかしたせいか、我がままいっばいで言う事を聞きません。

きっと佐和子くらいの時期には、遼太郎も歳を重ねて温厚で気長になっていたんでしょうねえ。

今は、その遼太郎の置き土産”佐和子様の気まぐれ”に、他の猫達も人達も翻弄される日々に、大笑い出来る幸せに感謝しています。

遼太郎は人間も大好きで、宅配便の人や、郵便の人が来ても全然平気。

チャイムが鳴ると私より先に玄関に行って、“はいはい、いらっしゃい、ほら!早く開けて♪”と待っていたものです。

荷物を持って来た人の靴のニオイをひつこく嗅いで困った事もありましたが、遼太郎は全ての生き物に興味津々でしたねえ。

最初は無視を決め込んでいた淳之介も、歳を追うごとに遼太郎の気長な”仲良ししよお〜♪”コールに折れて、隣にくっついて寝ていてもチラッと見るだけで、まっいいか…と一緒に寝ていたりするようになりました。

これは孤独だった淳之介も、いい仲間ってどういうものなのか…、気が付いてくれたらいいなあ〜と期待したものです。

なのにまさか、遼太郎が先に逝くとは…。

いま遼太郎の遺骨と遺影は、乙姫と一葉と並んでいつもこっちを見えています。

今でも遼太郎がいてくれたら…と思う事がありますが、ぼちぼちと先へ進み続けています。

遼太郎が逝った頃に産まれた健三郎を引き取って、これがまた遼太郎そっくりのおドジ…、遼太郎と違って怖がりだけど、失敗の仕方が遼太郎の様です。比べてはいけないと思うのですが、思い出してフッと笑えるのならいいのではないのでしょうか。

きっと今頃は、天国で種を超えた仲間を作って楽しく暮らしていると確信している次第です。

生前も犬が好きな猫族でしたからね。ペットロスって言葉には違和感を覚えます。

何故だかは分かりませんが、罪悪感の様な…変な感覚です。多分まだ遼太郎たちを引きずっているのかもしれませんが。

でも同居仲間を見送った痛みは消えないで当たり前…と、すばあ〜と割り切って…、いつまでも遺骨を持っていたっていいじゃない!と開き直って…、今いる同居猫と楽しく暮らすのが一番ですよ。

猫たちと日々わさわさと大騒ぎに暮らしておられる皆様、この大騒ぎがなんと私達を癒してくれている事か…。

そんな猫たちに感謝しながら、叱り続けてください。今日もどこかで「こらー!!」って声が聞こえてきそうですね。

猫たちも負けるな!人たちも負けるな!

とはいえ、人は常に猫たちに服従させられてしまうのです。執事でいいわあ〜と楽しんでください。

